

琉球大学学術リポジトリ

沖縄関係

沖縄復帰記念式典(4) (ロジスティックス関係)

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2019-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: - メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/43583

報
道

一般情報

第108号 一 目 次

昭和47年5月15日

1. インドネシア共和国大統領と日本国総理大臣との会談に関する共同発表(14日)
... 英文
2. 人 事 (14/5日付)
3. 米国務長官書簡(15日) ... 英文
4. アメリカ局長ブリーフ(13日)
5. 沖縄復帰後記念式典(15日)

情報文化局報道課

Joint Statement following
Meetings between the Head of Government
of the Republic of Indonesia and
the Prime Minister of Japan

Tokyo, May 14, 1972

1. President Soeharto and Prime Minister Sato, meeting in Tokyo on May 10 and 12, 1972, had a frank and fruitful exchange of views on wide-ranging subjects of common interest and concern to both countries. The discussions were held in a most cordial and friendly atmosphere and contributed greatly to the deepening of mutual understanding between the two countries.
2. The President and the Prime Minister exchanged their views on recent developments in the international situation, particularly in Asia, following the visit of President Nixon to China, and discussed their policies in the light of such developments.
3. The President and the Prime Minister, sharing the deep concern over the deteriorating situation in Indo-China, expressed their sincere hope that a speedy and peaceful settlement of the Indo-China conflicts may be brought about. They agreed that their Governments should co-operate closely in rendering any assistance necessary for restoring peace and stability in this area.

4.

4. The President and the Prime Minister noted with satisfaction the increasing importance of regional co-operation in achieving stability and prosperity in the East Asian and West Pacific region. The President explained to the Prime Minister the growing sense of regional spirit, solidarity and cohesion among the countries of Southeast Asia, which is reflected particularly in the activities of ASEAN aimed at strengthening the national resilience of the member countries. The Prime Minister, welcoming such trend among Southeast Asian countries, expressed the willingness of his Government to extend its co-operation to the ASEAN, if such is the common desire of the member countries.

5. The President and the Prime Minister noted with satisfaction the great strides thus far made in Japan's official assistance to Indonesia and reaffirmed the need to promote this co-operation further in the years to come. The President expressed his appreciation for the aid extended by the Japanese Government within the framework of the IGGI, and expressed the hope that the Japanese Government would provide further assistance on an increasing scale to meet future aid requirements of Indonesia. The Prime Minister stated the readiness of the

the Japanese Government to continue to play its active role in the IGGI in the light of the recently increasing IGGI aid to Indonesia.

6. The President and the Prime Minister noted the progress made in the economic co-operation in the private sectors of the two countries and reaffirmed the need to strengthen this co-operation further through frank exchanges of views between the two Governments and adequate support on their part to their respective private sectors. The President underlined the high importance of the Asahan hydro-electric power and aluminum smelter project in this connection. The Prime Minister mentioned the possibility of the support of the Japanese Government to the Japanese enterprises concerned if and when they are given the approval for investment.

7. The President, with due observance of the vast development of the Japanese economy, was deeply aware of the important role played by oil in sustaining the momentum of the expanding Japanese economy. The President further noted Japan's need for low sulphur oil in mitigating the growing problem of pollution in her efforts to harmonize the various facets of economic and social development. In view of the above the President confirmed that the

Indonesian

Indonesian Government would provide the necessary facilities for the supply of 58 million kilolitres of oil with low sulphur content to Japan over a period of 10 years in excess of the supply through existing commercial channels. The Prime Minister expressed his appreciation for the President's thoughtfulness and stated the readiness of the Japanese Government to extend to Indonesia an untied project loan, including local cost financing, on concessional terms to the amount of 62 billion yen with a view to contributing to the development of the oil sector in Indonesia and that the loan would constitute neither a part of Japan's assistance to Indonesia within the framework of the IGGI nor an advance payment for the supply of oil to be delivered in the future.

8. The President and the Prime Minister, expressing their satisfaction with the close and friendly ties existing between the two countries which are reflected in the fruitful results of their talks, agreed upon annual consultations to be held between representatives of their two Governments taking place alternately in Indonesia and Japan, to discuss international issues as well as matters affecting the relations between the two countries.

2. 人事 (14日付)

願に依りオキナワ復帰準備委員会日本国政府代表を免ずる

オキナワ復帰準備委員会日本国政府代表

タカセ・ジロウ

(15日付)

外務省顧問 大使の名称を与える

タカセ・ジロウ

ブレトリア総領事

大臣官房審議官

ニシザワ・ケンイチロウ

安保課オキナワ分室

オキナワ復帰準備委員会日本国政府代表公使

ヨシオカ・イチロウ

帰朝

ベルギー参事官

シノダ・ノブヨシ

ベルギー一書

大蔵省国際金融局局付

フジタ・ツネオ

大臣官房在外公館課長

ワイエトナム参事官

ヤナイ・シンイチ

帰朝

ホンコン領事

トモチカ・ヨウイチロウ

ホンコン領事

4. アメリカ局長ブリーフ（13日）

（ロジャーズ長官書簡及びフクダ外相のアグニュー副大統領へ）

（局長） 11月6、7日のサンクレメンテ会議でサトウ総理、フクダ大臣が説明された結果、最終的に出てきたものがこのロジャーズ長官書簡であり、一読されれば、核ぬきははつきりしている。

（問） 日本側が継承した書簡案とだいたい同じか。

（答） 主旨はそうだ。われわれとしては、ロジャーズ、ブリーフ両長官も議会で核が無くなることを言明しているし、それを引用して、日本側にはつきりいつてほしい旨再三申し入れた。米側もそれ自体には反対しなかったが、外交書でしかも大統領の決裁が必要であることから、各省と協議の上、これが米側の最大限行ない得る声明であるとして出てきたわけだ。この書簡では、1960年のキシ・アイゼンハワー声明が再確認されており、これは米側の意図が変更されていないことを確認する点で意義がある。

（問） しかし、キシ・アイク声明があつてもいろいろ問題が起きたからこそ交渉しなければならなかったわけで、同声明を再確認しても余り意味はないのではないか。

（答） 少なくともこういうことはいえるだろう。つまり、キシ・アイク声明によつて、日本本土に関する限りは核兵

器がもち込まれたことはなく、オキナワについては共同声明第8項と今度の協定の第7条で完全に撤去され、それに加えて本土と同じ様にキシ・アイク声明をかぶせたことになる。如何なることを書こうと、何をしよう、疑い出せば切りのないわけで、検証がなければ意味がないという人もあるが、例えば検証した後でも理論的にはもち込むといふことも考えられる訳であるから、結局は相手の最高首のうの言葉を信じる他はない。

（問） 検証とまでは行かなくとも、疑がわしい時にはみせてもらうといつた交渉は今後もやるのか。

（答） 本当に疑がわしいとなれば、米側に対し確認をさせてくれというだろうし、米側もそれに協力してくれるだろう。

（問） この種の書簡を日本以外の国に出したことはあるのか。

（答） ない。先例となるので米側もそれを考慮して文言を考えたものと思う。

（問） 野党はどくガスについてもいつているが、これについてはどうなのか。

（答） オキナワからは去年8月にどくガスは全部もち出したし、それ以外にないと米側はいつているし、本土についてはもち論それ以前にない旨いつている。これはひいつ

いてだが、Bについては米国自身製造を停止して、工場を他に転換しているのではつきりしている。それに接近にはB兵器の禁止協定も成立したわけで、こういつたことから考えると、どくガスについても、やはりこれは心理的なものではないかと思う。

(問) 今日の大佐・アグニュー会談はどんな内容か。

(答) 一般のあいさつから始まり、ベトナム情勢、国連について話した。日米の二国間関係については、アグニュー副大統領がサトウ総理やフクダ大臣の会談で強調していたことはアメリカは太平洋の対がんとしてとにかく日本を一番大事にしており、中国について頭越しだうんぬんといわれるが、これは全く異質のもので、日本を最重要視している旨はつきりいつていた。また経済問題に関してもせん難。通貨問題等国内的にはいろいろ困難があつたにもかかわらず、本当に良くやつてくれたと感謝していた。かれはかれなりのPHILOSOPHYをもつていて相当な人物だとの印象をうけた。

(問) 今日の持回り閣議で決まつた基地の問題はどうなつたか。

(答) 第1はハーバードユーが開放になることだ。ただ、日本側の都合により3ヶ月以内に開放になると困るので、8月の半ばごろ開放になるとの形でまとまつた。第2は

。一番重要な点だが、ナハ空港のそばを通っている3号線で、これは米側専用道路だつたのだが、歩道きょうやフェンスを作ること条件に日本側に開放されることになる。

(問) これで一区切りついたわけだが、局長の感想はどうか。

(答) 今度アグニュー副大統領がきても感じたことだが、どうもわれわれはマクロでなくマイクロというか、せまい視野の中に住んでいるように思う。確かにオキナワ返かんというのは大きな出来事であることに間違いはないが、日本を取りまく世界は大ききなうずの中で動いており、もつと高い次元で考える必要があるように思う。私の見地からすれば、オキナワが返かんされ、これで戦後から続いた終戦処理的日米関係はなくなることになる。。安保条約はあるが、これも1960年に日本の自主的な意思で改訂したのであつて、今の安保は日本のためにもアメリカのためにも存在しているわけだ。一部の議論を聞いていると、安保条約は専ら日本のためのみにあり、しかも、アメリカの占領国としての日本と締結した条約であるとの観点からの議論が多いけれども、安保については日米相互の利益に立つて考えていかなければ方向を誤まるだろう。アグニュー副大統領も日本は本当に良くやつてくれてありがたかつたといつて、日本を人立ちの大国としてみているのに、日本

人自身がなかなかそう見ていない。米側は、日本は東南アジアに対しばく大な援助をし、特に人道的援助を行う大國だとの認識をもつまでに至っており、オキナワを含めた諸問題を今度余り病的にみないで、もつと明るくみて欲しいと思う。

5. OKINAWA FUKKI KINEN SHIKTEN (15TH)

HIS MAJESTY THE EMPEROR'S SPEECH

IT IS A CAUSE OF GREATEST PLEASURE TO ME THAT OUR LONG CHERISHED DESIRE FOR THE REVERSION OF OKINAWA HAS BEEN REALIZED TODAY.

IT HAS BEEN MADE POSSIBLE BY THE UNTIRING ENDEAVORS OF OUR PEOPLE, ESPECIALLY THE PEOPLE OF OKINAWA PREFECTURE, AND THE FRIENDLY RELATIONS BETWEEN JAPAN AND THE UNITED STATES OF AMERICA, WHICH I HIGHLY APPRECIATE.

ON THIS OCCASION, I WISH TO EXPRESS MY DEEP FEELING FOR THE GREAT SACRIFICES SUFFERED BY THE PEOPLE OF OKINAWA PREFECTURE DURING AND AFTER THE LAST WAR AND MY HEARTFELT SYMPATHY FOR THEIR DIFFICULTIES OVER A LONG PERIOD, AND I EARNESTLY HOPE THAT ALL THE PEOPLE OF OUR COUNTRY WILL FURTHER COOPERATE WITH EACH OTHER AND BEND THEIR EFFORTS TO THE ESTABLISHMENT AND DEVELOPMENT OF A PEACEFUL AND AFFLUENT PREFECTURE OF OKINAWA.

○オキナワ復帰記念式典におけるサトウ内閣総理大臣式辞

本日、アノノウ、コウコウ両ヘイカのご臨席をおおぎ、アグニュー・アメリカ合衆国副大統領をはじめ内外貴賓多数のご参列を得て、オキナワ復帰記念式典を挙行いたしますことは、私の深くよろこびとするところであります。

オキナワは本日、そ国に復帰いたしました。私は、まず、このことを、過ぐる大戦においてとおといぎせいとなられたいく百万のみたまに、つつんでご報告いたしたいと思ひます。大戦の末期に戦場となり、とおとい多くの人命を失なつたオキナワの地は、戦後長きにわたつて米国の施政楯下におかれてきたのであります。今日以降、私したちは同ほう相寄つてよろこびとかなしみを共に分かちあうことができるのであります。私共の感激はいうまでもありません。そ国あいにもえて身命をささげた人々を思ひ、現代に生きるわれわれとして、ここに、重ねて自由を守り平和に徹するちかいを新たにしますものであります。

私は、27年の長年月にわたつて、大いなるくのうにたえ、ひたすらそ国復帰の日を待ち望んでこられたオキナワ同ほう百万の心筋に思ひをいたすとき、まことに深じんな感がいを感じ得ません。戦中、戦後におけるオキナワけん民各位のご労は、何をもつてもつぐなうこととは

きませんが、今後本土との一体化を進めるなかで、オキナワの自然、伝統的文化との調和を図りつつ、総合開発の推進に努力し、ゆたかなオキナワけんづくりに全力をあげる決意であります。

さらに私は、国民各位とともに、オキナワのそ国復帰をけいがするとともにその歴史的意義について深く考えてみたいと思ひます。戦争によつて失われた領土を、平和のうちに外交交渉で回復したことは、史上きわめてまれなことであり、私はこれを可能にした日米友好のきずなの強さをつう感するものであります。今後日米両国は太平洋をほさむ先進国家としてともに世界の平和と発展に大きな責任をもつ立場におかれます。この日米関係の新時代は、これまで以上の信頼と理解による協調をもつて特徴づけられなければならぬと信じます。

私はこの機会に、オキナワ返かんに当つて、米国民政府ならびに米国民より示された友ぎに感謝し、その大局に立つた英まいな決断にけい意を表するものであります。

国民のみなさん、われわれはとおとい歴史の教くんを生かし、さらに平和への決意を新たにし、わが国のアジア・太平洋諸国に対する友好と協力のかけはしとして、平和でゆたかなオキナワの建設に努めなければなりません。

16

歴史的記念の日を迎えるにあたって決意の一たんをのべ
。式辭といたします。

昭和47年5月15日

内閣総理大臣 サトウ・エイサク

17

ADDRESS BY THE VICE PRESIDENT
OKINAWA REVERSION CEREMONY
TOKYO, JAPAN - MAY 15, 1972

IT IS A GREAT HONOR FOR ME TO REPRESENT THE
PRESIDENT OF THE UNITED STATES ON THIS HISTORIC OCCASION
THE RETURN OF ADMINISTRATIVE AUTHORITY OVER THE RYUKYU AND
DAITO ISLANDS TO JAPAN. PRESIDENT NIXON HAS ASKED ME
TO READ THE FOLLOWING PROCLAMATION, WHICH FORMALLY
BRINGS TO A CLOSE THE UNITED STATES CIVIL ADMINISTRATION
OF OKINAWA.

//////

2.

BY THE PRESIDENT OF THE UNITED STATES OF AMERICA,
A PROCLAMATION, CONSIDERING THAT:
THE AGREEMENT BETWEEN THE UNITED STATES OF
AMERICA AND JAPAN CONCERNING THE RYUKYU ISLANDS AND THE
DAITO ISLANDS, PROVIDING FOR THE RETURN TO JAPAN OF
ADMINISTRATIVE RIGHTS OVER THESE ISLANDS, WAS SIGNED AT

WASHINGTON AND TOKYO ON JUNE 17, 1971:

THE SENATE OF THE UNITED STATES OF AMERICA BY
ITS RESOLUTION OF NOVEMBER 10, 1971, TWO-THIRDS OF THE
SENATORS PRESENT CONCURRING, GAVE ITS ADVICE AND CONSENT TO
RATIFICATION OF THE AGREEMENT:

THE PRESIDENT RATIFIED THE AGREEMENT ON JANUARY
20, 1972, IN PURSUANCE OF THE ADVICE AND CONSENT OF THE
SENATE:

THE INSTRUMENTS OF RATIFICATION OF THE
RESPECTIVE PARTIES WERE EXCHANGED AT TOKYO ON MARCH 15, 1972:

//////

3.

AND IT IS PROVIDED IN ARTICLE IX OF THE
AGREEMENT THAT IT SHALL ENTER INTO FORCE TWO MONTHS AFTER
THE DATE OF EXCHANGE OF THE INSTRUMENTS OF RATIFICATION:

NOW, THEREFORE, I, RICHARD NIXON, PRESIDENT OF
THE UNITED STATES OF AMERICA, PROCLAIM AND MADE PUBLIC THE
AGREEMENT TO THE END THAT IT SHALL BE OBSERVED AND
FULFILLED WITH THE UNITED STATES OF AMERICA AND BY THE
CITIZENS OF THE UNITED STATES OF AMERICA AND ALL OTHER
PERSONS SUBJECT TO THE JURISDICTION THEREOF. IN

TESTIMONY WHEREOF, I HAVE SIGNED THIS PROCLAMATION AND
CAUSED THE SEAL OF THE UNITED STATES OF AMERICA TO BE
AFFIXED.

//////

4.

BEING A LEGAL DOCUMENT, THE PROCLAMATION I HAVE
JUST READ DOES NOT BEGIN TO CONVEY THE REAL SIGNIFICANCE
AND EMOTIONAL IMPACT THAT THIS OCCASION HOLDS FOR THE PEOPLE
OF JAPAN AND OKINAWA. NOR DOES IT ADEQUATELY REFLECT THE
FEELINGS OF THE PEOPLE OF THE UNITED STATES. BUT TODAY'S
CEREMONY DOES REFLECT THE SENSE OF FULFILLMENT SHARED BY
BOTH OUR COUNTRIES. IT IS THE LOGICAL CULMINATION OF THE
UNITED STATES STATEMENT AT THE SAN FRANCISCO PEACE
CONFERENCE OF 1951 RECOGNIZING JAPAN'S RESIDUAL SOVEREIGNTY
OVER THE RYUKYU AND DAITO ISLANDS. AND TODAY'S CEREMONY,
OF COURSE, REPRESENTS THE FULFILLMENT OF THE LONG-HELD
ASPIRATIONS OF THE PEOPLE OF JAPAN AND THE PEOPLE OF
OKINAWA TO BE REUNITED.

//////

5.

IN A VERY REAL WAY, THIS CEREMONY MARKS A

20

TURNING POINT IN THE RELATIONS BETWEEN OUR TWO COUNTRIES,
FOR IT RESOLVES THE LAST MAJOR ISSUE OF THE WAR. IT IS
THE END OF AN ERA, BUT, MORE IMPORTANTLY, IT IS THE
BEGINNING OF A NEW ONE IN WHICH WE CAN EXPECT AN EVEN
GREATER COMMUNITY OF INTERESTS BETWEEN OUR TWO GREAT
NATIONS. I AM CONFIDENT THAT THIS NEW RELATIONSHIP,
BASED UPON FULL PARTNERSHIP, IS WELL-LAUNCHED WITH
TODAY'S HISTORIC CEREMONY.

//////

6.

TODAY ALSO IS THE BEGINNING OF A NEW CHAPTER
IN THE HISTORY OF THE OKINAWA PREFECTURE. FOR AMERICANS,
IT IS THE END OF MORE THAN TWO AND A HALF DECADES OF UNITED
STATES ADMINISTRATIVE AUTHORITY OVER THE RYUKYUS. WE
LOOK BACK ON THOSE YEARS WITH CONSIDERABLE PRIDE IN THE
IMPROVEMENTS WE BELIEVE WE HAVE MADE IN THE WELL-BEING OF
THE RESIDENTS OF OKINAWA. AND WE CHERISH THE DEEP
FRIENDSHIP AND RESPECT WHICH HAVE DEVELOPED BETWEEN THE
PEOPLE OF OKINAWA AND OF THE UNITED STATES.

//////

7.

21

WE PLACE THE HIGHEST VALUE ON OUR RELATIONS WITH JAPAN.
A BALANCED RELATIONSHIP BETWEEN OUR TWO COUNTRIES, BASED UPON
INTERDEPENDENCE, EQUALITY AND RECIPROCITY, IS ESSENTIAL --
NOT ONLY TO OUR MUTUAL WELL-BEING, BUT ALSO TO THE CONTINUED
POLITICAL AND ECONOMIC DEVELOPMENT OF THE REST OF ASIA. FOR
THESE REASONS, IT IS A PARTICULAR HONOR FOR ME TO REPRESENT
PRESIDENT NIXON TODAY AND TO EXTEND THE WARM AND SINCERE
CONGRATULATIONS OF THE AMERICAN PEOPLE TO THE PEOPLE OF
JAPAN AND OKINAWA ON THIS HISTORIC AND UNIQUE OCCASION.

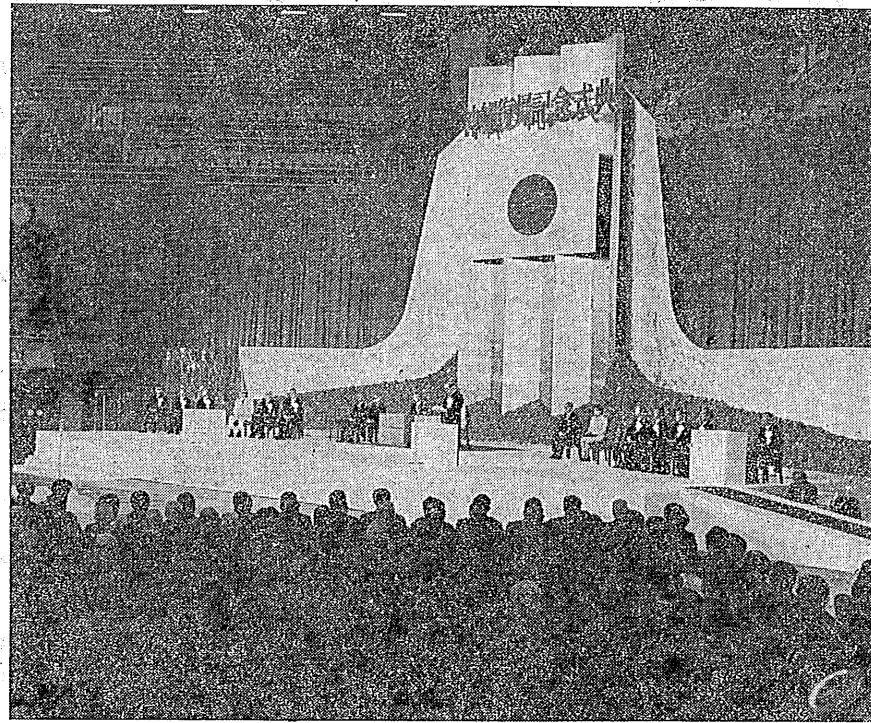
NOW I TAKE GREAT PLEASURE IN PRESENTING TO PRIME
MINISTER SATO THE PROCLAMATION OF THE PRESIDENT OF THE
UNITED STATES ANNOUNCING THE REVERSION OF OKINAWA TO JAPAN.

+ + +

「沖縄県、いま帰る」

東京＝沖縄復帰記念式典＝那覇

＝ 総 理 府 ＝



東京会場であてられた九段の日本武道館における「沖縄復帰記念式典」

官報
資料版

No. 730
毎週水曜日発行
大蔵省印刷局

昭和二十五年三月二十二日
第三版 郵政省認可

目次

- ▼ 沖縄県、いま帰る…………… 総理府：1
- ▼ 月例経済報告…………… 経済企画庁：4
- ▼ 文化財の保護…………… 文化庁：5
- ▼ 世論調査・公害問題…………… 総理府：7
- ▼ 米穀管理の現状と問題点…………… 農林省：9
- ▼ 人権擁護委員の役割…………… 法務省：12
- ▼ 刑務作業の現況…………… 法務省：14
- ▼ 昭和三十九年の農業概況…………… 農林省：16

東京＝九段の日本武道館 ＝ 沖縄＝那覇市民会館

沖縄の祖国復帰を祝賀し、記念して、さる五月十五日午前十時から東京都千代田区九段の日本武道館と沖縄県那覇市の那覇市民会館の両会場において内閣主催の「沖縄復帰記念式典」が開かれた。

この日、東京会場の日本武道館には天皇・皇后両陛下をはじめ、閣僚、国会議員、沖縄関係者、各界代表、青少年らが出席し、アメリカ合衆国を代表して、アグニュー副大統領、沖縄県を代表して高里副知事が出席した。

式典は砂田総理府参事副官の司会により、まず竹下官房長官の開式のことばで始まり、全員で君が代を斉唱した後、佐藤内閣総理大臣が式辞を述べ、このあと、さきの大戦で亡くなった人々や、祖国復帰を待ちきれなくなった人々のご冥福を祈るため、全員が起立して黙とうを捧げた。

天皇陛下のおことば

本日、多年の願望であった沖縄の復帰が実現したことは、まことに喜びにたえません。

このことは、沖縄県民をはじめわが国民のたゆまぬ努力と日米両国の友好関係に基づいたものであり、深く多とすることろであります。

この機会に、さきの戦争中および戦後を通じ、沖縄県民のうけた大きな犠牲をいたみ、長い間の労苦を心からねぎらうとともに、今後全国民がさらに協力して、平和で豊かな沖縄県の建設と発展のために力を尽くすよう切に希望します。

天皇陛下のおことばに続いて、アメリカ合衆国政府代表アグニョー副大統領がニクソン大統領の沖繩返還に関する宣言書を披露し、祝辞を述べた。その宣言書は佐藤総理大臣に手交した。続いて、船田衆議院議長、河野参議院議長、石田最高裁判所長官が祝辞を述べ、宮里沖繩県知事が沖繩県を代表して挨拶をした。沖繩県の青少年代表長志孝助君(小島青年連合会会長)と上江田利枝さん(小島青年連合会総務部長)、また全国の青少年を代表して、過去に青少年活動で沖繩訪問の経験のある内田博章君(法政大学三年)と塚本陽子さんが沖繩の復興の日を迎えての決意を表明した。引き続き佐藤内閣総理大臣の発声で三呼びを三呼び、三原内閣官房副長官の閉式のご挨拶で式典は終わった。

豊かな沖繩県づくりに全力

式辞 内閣総理大臣 佐藤 栄作



式辞をのべる佐藤総理大臣

一方、那覇会場の那覇市民会館では、東山総理府総務副長官の閉式のご挨拶、若者が代弁するマイク回線を通じて、東京会場と一体となり、佐藤内閣総理大臣の式辞が送られ、続いて三呼び、天皇陛下のおことばも会場内に送られた。山中総理府総務副長官、星沖繩県知事、星沖繩県議会議長の挨拶のあと、ピトリ、那覇駐在アメリカ総領事、床次衆議院代表(沖繩及び北方問題に関する特別委員会委員長)、長谷川参議院代表(沖繩及び北方問題に関する特別委員会委員長)、吉田最高裁判所代表(最高裁判所事務総長、油田全国地方公共団体代表(佐賀県知事)が祝辞を述べ、そのあと青少年代表が決意を表明し、山中総務副長官の発声で三呼びを三呼び、式典を閉じた。

沖繩は本日、祖国に復帰いたしました。わたくしは、まず、このことを、過ぐる大戦において尊い犠牲となられた幾百万の英霊に、謹んで報告したいと思っております。大戦の末期に戦場となり、尊い多くの人命を失なつた沖繩の地は、戦後長きにわたつて米国の施政権におかれてきたのでありますが、今日以降、わたくしは同胞相寄り喜びと悲しみを共に分かちあうことができるのであります。わたくしどもの感激はいちまでもありません。祖国愛に燃えて身命を捧げたひとびとを思い、現代に生きるわれわれとして、ここに、重ねて自由を守り平和に徹する誓いを新たにしますものであります。

国民の皆さん、沖繩は本日、祖国に復帰いたしました。心からこれを喜びたいと思つて、願ひれば戦後二十七年に及ぶ沖繩の祖国復帰への道のりは長く、まことに困難なものであります。その間、あらゆる苦難にたえ、たゆまぬ努力を続けてこられた百万同胞のご苦労をねぎらうとともに、きびしい国際情勢のなかでよくこのことをなしたとけられた国民各位に対し、心から敬意を表するものであります。

沖繩列島は、いにしえから、わが国と東南アジアや中国大陸を結ぶ接点ともいうべき役割を果たしてまいりました。この周辺において東西の多くの文化が相互に影響しあつたのであります。このように重要な位置を占めている沖繩が、今日わが国に復帰したことは、われわれ日本人の国際的責任と役割をいっそう大きなものとするともに、わが国の将来に新しい展望を与え、わが国と世界の平和と繁栄のため貢献しようとするに、誓いたいと思つております。

沖繩には美しい自然と豊かな文化があります。政府は、沖繩の自然と文化を生かすべく、平和で豊かな県づくりに努めます。沖繩海洋博覧会の推進をはじめ、沖繩の開発発展を国民的課題として今後とも積極的に取り組む決意であります。これまで沖繩復帰に注がれてきた沖繩県民のたくましい力は、その原動力となるものと確信いたします。沖繩の祖国復帰が実現した今日、一九七〇年代の新しい国際関係のなかで世界の平和と繁栄のため貢献しようとする最善を尽くすことをここに国民各位とともに誓いたいと思つております。

政府声明

昭和四七・五・一五

わたくしはまた、二十七年の長年月にわたつて、大なる苦悩にたえ、ひたすら祖国復帰の日を待ち望んでこられた沖繩同胞の百万の心情に思いをいたすとき、まことに深甚な感慨を禁じ得ません。戦中、戦後における沖繩県民各位のご苦労は、何をもつてしてもつぐなうことはできませんが、今後本土との一体化を進めるなかで、沖繩の自然、伝統的文化の保存と調和をはかりつつ、総合開発の推進に努力し、豊かな沖繩県づくりに全力をあげる決意であります。

さらにわたくしは、国民各位とともに、沖繩の祖国復帰を慶賀するとともに、その歴史の意義について深く考えてみたいと思つております。戦争によつて失なわれた領土を、平和のうちに外交交渉で回復したことは、史上きわめて稀なことであり、わたくしはこれを可能にした日米友好のきずなを痛感するものであります。今後日米兩國は太平洋をはきき先進国家としてともに世界の平和と発展に大きな責任を持つ立場におかれます。この日米関係の新時代は、こ

れまで以上の信頼と理解による協調をもつて特微づけられなければならないと信じています。わたくしはこの機会に、沖繩返還に當つて、米政府ならびに米国民より示された友誼に感謝し、その大局に立つた英邁な決断に敬意を表するものであります。国民の皆さん、われわれは尊い歴史の教

沖繩の歴史に新しい一章始まる

アグニョー米副大統領のあいさつ



あいさつする米副大統領

本日、琉球諸島および大東諸島の施政権が日本へ返還されるこの歴史的な式典に、アメリカ合衆国大統領を代表して参列いたしますことは、私の大きな光栄とするところであります。ニクソン大統領は、合衆国の沖繩民政を終結させる次の宣言を代読するよう、私に要請しました。

アメリカ合衆国大統領の宣言
琉球諸島及び大東諸島の施政権を日本へ返還することを規定した琉球諸島及び大東諸島に関するアメリカ合衆国と日本国

訓を生かし、さらに平和への決意を新たにし、わが国のアジア・太平洋諸国に対する友好と協力のかけ橋として、平和で豊かな沖繩の建設に努めなければなりません。歴史の記念の日を迎えるにあつた決意の一端を述べ、式辞をいたします。

この間の協定が、一九七一年六月十七日、ワシントンと東京で署名され、

アメリカ合衆国上院は、出席議員の三分の二の同意を得た一九七一年十一月十日の決議によつて、同協定の批准に上院の助言と同意を与え、

大統領は、上院の助言と同意に従つて、一九七二年一月二十八日、同協定を批准し、

それぞれの当事国の批准書が、一九七二年三月十五日東京で交換され、かつ同協定の第九條に、同協定は批准書交換の日から二ヵ月後に効力を生ずると規定されていることを考慮し、

よつて、私、アメリカ合衆国大統領リチャード・ニクソンは、同協定がアメリカ合衆国によつて、およびアメリカ合衆国の市民ならびにその管轄下にある他のすべての人によつて順守され、履行されるように、同協定を布告し、公表する。

以上の証憑として、私は、この宣言に署名した法律文書であるため、ただいま私が読み上げた宣言は、この式典が日本と沖繩の国民に意味する真の意義と感情的な影響を伝えるものであります。また、この式典は、合衆国民の感情を正確に反映するものでもありません。しかし、本日の式典は、われわれ両国が分ち合つて居る成就の意義を反映しています。この式典は、琉球および大東諸島の日本の潜在的な主権を認め一九五一年のサンフランシスコ講和会議における合衆国の声明の必然的な終局を飾るものであります。そして、本日の式典は、もちろん、日本国民と沖繩住民の再統合への多年の念願が実現したことを意味するものであります。

きわめて現実的な意味において、この式典は、戦争の最後の主要問題がこれによつて解決をみるという点で、われわれ両国間の関係を転機を画するものであります。それは、一時代の終わりを意味しますが、より以上に重要なことは、偉大なわれわれ両国間のさらなる一層大きな利害の一致を期待できる新しい時代が始まるということです。この新しい関係は、本日の歴史的な式典によつて幸先の良いスタートを切つた、と私は確信するものであります。

本日はまた、沖繩の歴史の上で新しい一章が始まる日でもあります。アメリカ国民にとつては、二十五年余にわたる合衆国の琉球諸島に対する施政権が終結する日であり、この歳月を振り返つて、われわれは、沖繩の人々の福祉の上で種々の改善を

行なつたと信じており、そのことに少なからぬ誇りを感じています。そして、われわれは、沖繩の人々と合衆国民の間に生まれた深い友情と尊敬の念を大切にしたいと思つております。

われわれは、日本との関係を、この上もなく重要視しています。相互依存、平等、互恵に基づきわれわれ両国間の均衡のとれた関係は、両国の相互の福祉にとつてのみならず、アジアの他の諸国の継続的な政治的、経済的發展にとつても不可欠であります。これらの理由のために、本日ニクソン大統領に代わつて、この歴史的でユニークな式典において、日本と沖繩の皆さんへアメリカ国民の心からの真心こめた敬意をお伝えすることは、私にとりまして格別の光榮とするところであります。

沖繩を日本へ返還することを布告した合衆国大統領宣言を、佐藤総理大臣閣下に贈呈することは、私の大きな喜びとするところであります。

- #### 6月のおもな行事
- 1日(水) ☆水産週間(7日まで) ☆農業発表防止運動(30日まで) ☆気象記念日 ☆電波の日
 - 4日(日) ☆歯の衛生週間(10日まで)
 - 5日(月) ☆全国老人福祉事業会議(7日まで)
 - 7日(水) ☆財量記念日 ☆日本芸術院授賞式
 - 9日(金) ☆計量研究所の一般公開
 - 13日(火) ☆東京国立博物館で「正倉院宝物模造」特別展示(7月23日まで)
 - 18日(日) ☆科学警察研究所の一般公開
 - 25日(日) ☆らいを正し理解する週間(7月1日まで)
 - 28日(水) ☆貿易記念日



各国為替市場は 落ち着いた気味

最近の欧米為替市場をみると、アメリカの景気回復が本格化する一方、西欧諸国の景気もいくぶん立直り傾向を示している。この間欧米金利差の縮小などを背景に各国為替市場は落ち着いた気味に推移している。

外貨準備は減少

わが国の貿易動向をみると、輸出超過額(季節調整値)は、一月、二月とそれぞれ前月比二・五%、三・二%増加した。三月は〇・六%増となった。商品別には、機械機器が自動車を中心にいぜん高い伸びを示しているものの、その他は伸び率鈍化の傾向が続いている。先行指標をみると、商社の輸出成約高(円ベース、ただし自動車、家庭電器の大部分を含まず)の伸びは停滞しており、輸出信用状授受額(季節調整値)も三ヶ月移動平均の前月比で、一月〇・三%減、二月〇・五%増、三月〇・八%増とほぼ横ばいに推移している。

一方、輸入超過額(季節調整値)は、二月に前月比六・六%増加した。三月も六・三%増と、引続き大幅増加を示した。原材料輸入はいぜん停滞しており、また三月には航空機輸入による一時的要因も加わっているが、食料品や消費財の増加に支えられて輸入の水準はひとことに比べ高まってきている。このように輸出の伸びがやや鈍り、輸入の増加がみられるものの、兩者の水準の開きは大きく、三月の貿易収支(季節調整値)はいぜん七億七〇〇〇万ドルの黒字となった(原数値では九億一〇〇〇万ドルの黒字)。しかし、貿易外収支、移転収支は合わせて二億七〇〇〇万ドル、また長期資本収支は外証増投資

アメリカの鉱工業生産は二月まで連続六ヶ月増加のあと三月も前月比〇・六%の増加となり、一・一ヶ月の實質国民総生産は前期比五・三%(年率)増と、昨年十一月の同五・八%増に続き高い伸びを示した(一九七一年は前年比二・七%増)。これには住宅建設が引続き好調であるほか、設備投資や政府支出の伸びが高まったことが影響している。しかし物価の騰勢は根強く、また貿易収支は、二月に港務ストの影響もあって六億ドルの赤字となったと推定されている。三月も五億八〇〇万ドルといぜん大幅な赤字をつづけている。

西欧諸国の経済は、これまでとられてきた景気回復の効果もあって先行き回復のきざしが見られている。フランスでは、輸出と個人消費の堅調に支えられて、生産の伸びが鈍り、西ドイツの景気にも輸出受注、政府支出の増加、生産の回復などから底入れ感が広がっている。また、イギリスでは炭鉱ストの影響もあって景気回復が遅れているが、大幅減税を含む七二年度予算発表後は企業の景気見直しにかなりの改善がみられる。ただ各国とも消費者物価の高騰が続いており、またイギリスの貿易収支は一、二月と赤字に転じた。

この間、欧米金利差の縮小や欧州諸国の為替管理措置等の強化もあって三月後半に持直したみせたドル相場は四月中もおおむね安定した推移を示した。こうしたなかで、E.C諸国は先に決定された域内通貨間の為替変動幅縮小(これまでの四・五%を二・二五%)を四月二十四日

の流入超過が続いているものの、輸出超過(信用の供与や対外直接投資の増加など、本部資本の流出を中心として前四〇〇〇万ドルと、いずれもこれまで最高の赤字となり、くわえて短期資本収支等が二月以降の為替管理の強化と輸出前受金の引落しを原因に一億九〇〇〇万ドルの赤字に転じたため、総合収支の黒字は一億二〇〇〇万ドルに縮小した(季節調整値では三〇〇〇万ドルの赤字)。なお、四十六年度の国際収支は、貿易収支の黒字増大、短期資本の流入から八億四〇〇〇万ドルの大幅黒字を記録した。一方、四月の外貨準備は前月一億三〇〇〇万ドル減少し、月末残高は一六五億四〇〇〇万ドルとなった。外貨準備の減少は四十五年七月以来一年九ヶ月ぶりのことである。また、円の対米ドル相場(野村物中レート)は、四月七入って三〇三円前後で推移した。

生産・出荷は回復基調 鉱工業生産は昨年十一月以降五ヶ月連続して増加し、出荷はそれを上回るテンポで伸びている。鉱工業生産(季節調整値)は二月に前月比〇・九%増加した。三月(速報)も一・一%の増加となった。業種別には精密機械、電気機械が大幅に増加し、一般機械、輸送機械なども上伸したが、鉄鋼、化学はかなりの減少となった。鉱工業出荷(季節調整値)は二月に前月比三・三%の大幅増加を示した。三月(速報)は一・五%の増加となった。業種別には一般機械、輸送機械の伸びが目立つが、電気機械、石油製品は反落した。生産者製品在庫率指数は二月に前月比四・三%の大幅低下のあと、三月(速報)も一・一%低下して一〇四・七(四十年=一〇〇)となった。

最近の生産・出荷の増勢には公共投資増大や民間住宅投資の持直し(建設資材やポンプ等)が大きく影響しているほか、流通段階など一部に在庫補充の動きもみられる。また金融緩和化

景気指標 回復への動きを示す

一生産・出荷は増加、卸売物価は漸騰一

卸売物価(季節調整値)は二月に前月比三・三%の大幅増加を示した。三月(速報)は一・五%の増加となった。業種別には一般機械、輸送機械の伸びが目立つが、電気機械、石油製品は反落した。生産者製品在庫率指数は二月に前月比四・三%の大幅低下のあと、三月(速報)も一・一%低下して一〇四・七(四十年=一〇〇)となった。

最近の労働供給の動きをみると求職の増加がとまると一方、中小企業を中心に求人が増加しつつあり、有効求人倍率(新規求人を除く、季節調整値)は二月一・〇倍のあと三月は一・〇

が進むなかで非製造業中心に一部中小企業などでこれまで手控えられてきた設備更新の動き(小型トラック等)がでてきたこと、電力会社の設備投資が活発であること(ポイラー、原動機等)なども寄与している。もっとも反面では鉄鋼、化学といった主要業種では不況カルテルを実施しており、開始ギャップもいぜん大きい。

設備投資の先行きを示す機械受注額(船舶を除く民需、季節調整値)は、前月比で、二月と減少のあと三月は電力からの大幅受注増により、四一・〇%の増加となった。しかし四半期別には四十六年十一月に前月比二九・四%減のあと四十七年一・三月は六・四%増となった。なお、機械受注見直し調査によれば、四月は前月比一九・一%の増加が見込まれているが、達成率を考慮するとはほぼ横ばいに推移するものとみられる。また当法人企業投資予測によると、四十七年四月・九月は前月比四・六%増となっており、製造業は低調ながらも中小規模の非製造業は高い伸びが見込まれている。建設工事受注額(季節調整値)は二月に前月比一四・五%増加した。三月(速報)も一〇・四%増となった。最近の動きを四半期別にみると、民間からの受注は四十六年十一月に前月比〇・四%増加した。四十七年一・三月には一・三%減と低調であるが、官公庁からの受注は四十六年十一月三・三%増のあと四十七年一・三月には一〇・三%増とかなりの増加となっている。一方、新設住宅着工戸数は一月に前年同月比二〇・二%減となった。二月は一七・三%増となった。このうち民間資金によるものは一月・四%増加のあと二月も一・九%の大幅増加となったが、公的資金によるものは一月の減少に続いて二月も二・〇%の微増にとどまっている。

最近の労働供給の動きをみると求職の増加がとまると一方、中小企業を中心に求人が増加しつつあり、有効求人倍率(新規求人を除く、季節調整値)は二月一・〇倍のあと三月は一・〇